

社会学は「文字で描く肖像画」。

そこから語り手の人生が、社会が見えてくる。

「ライフヒストリーやライフストーリーと呼ばれる作品は、

語り手ときき手が協働してつくりあげていくもの」と、時岡新先生。

あるときは聞き、あるときは聴き、ときには思いがけず聞いたりするなかで

語り手も、質問に答えて語ったり、なにげなく話したり、思いがけず言ったり。

インタビューを積み重ねるなかで紡がれた作品は、いわば文字で描く肖像画。

語り手の生い立ちや生き方、揺れる心のひだまでも、いきいきと描かれています。



語り手の声をとおして 私たちの生命、生活、人生を捉え、理解する。

社会学者の研究方法は、マクロとミクロ、メゾに大別されます。つまり社会の中で、目には見えないけれども確実にあるものが私たちにどう作用しているかということを考えるときに、大きく俯瞰して考える人と、真ん中あたりで考える人、小さく考える人がいる。たとえばひとりの障害者が自立生活を望んだとします。この人の生活は広く見れば国際的な条約によっても保障されていますし、小さく見れば毎日の具体的な生活介助によって継続されています。マクロ、ミクロ、メゾ、どのレベルでアプローチするにせよ、やっていることは一緒で、3つの視点を関連づけて社会のありようを解き明かしていくのが、社会学の面白いところです。

私自身は、近年はミクロな諸現象に注目し、ライフヒストリー、ライフストーリーという手法を用いて研究をしています。具体的には、重度の障害をもって地域で自立生活する方々のご経験を聴く、お父さんやお母さんと死別した遺児やそのご家族から聴く、というふたつの聴きとりを長いこと続けています。

ライフヒストリー / ライフストーリーは きき手と語り手の協働作業で生みだされる。

私がライフヒストリー/ライフストーリー研究に重きを置くようになったきっかけは、1995年に発生した阪神淡路大震災です。当時、私は茨城にいたのですが、親を亡くした子どもたちの就学支援を行っているグループと交流があり、そのグループが神戸に支援に入ったのを機に私も神戸入りし、そこから長い時間をかけて、震災で父親、母親を亡くした震災遺児とその家族の生活を追跡調査しました。重度障害者への聴きとりも、大学の後輩で、周囲の大学生に介助を頼んで一人暮らしをするひとりの全身性障害者との出会いから始まったもの。彼とは15年にわたる対話の時間を持ちました。対象者は変わりますが、重度障害者の方々への聴きとりは今も続いています。さまざまな人と出会い、お話を聴くなかでこんなこともありました。ご家族を自死で亡くした方々が定期的に集まる会に私も参加させていただき、そのあとの飲み会に参加したときのこと。隣に座った女性に「私もそろそろ時岡さんに話を聴いてもらおうかな」と言われ、結局13時間インタビューをしました。語り手と良い関係性ができ、



時岡 新 教授

TOKIOKA Arata

金城学院大学 国際情報学部
国際情報学科教授

1992年筑波大学第一学群社会学類卒業。
1994年筑波大学大学院修士課程環境科学
研究科修了。2000年筑波大学大学院博士課程
社会科学研究科単位取得退学。筑波大学技官、
金城学院大学現代文化学部講師を経て、2016
年同大国際情報学部准教授、2019年同大
国際情報学部教授に就任。

所属学会：日本社会学会 福祉社会学会
関東社会学会 東海社会学会
日本社会心理学会
日本社会学理論学会 障害学会

じっくりお話が聴ける。そんな時間を共有できることが、この研究の醍醐味であり、喜びです。こうした“きく”作業は、阪神淡路大震災の被災地へのスタディツアーや、金城学院の卒業生の方々に戦争体験を伺うなど、ゼミや社会調査実習で学生の皆さんにも体験してもらっています。

対面授業、遠隔授業をやって、見えてきたもの。

目下、授業で何より力を注いでいるのは、初年次教育プログラムです。「国際情報概論」は4人の教員で担当、前後期の初年次ゼミの運営を行う「WLI委員会」は委員長を務めています。今年度は大きな壁にぶつかりながら進めています。言うまでもなくコロナ対応です。前期の「レポートを書く」という課題は“相互にコメントし合う”ことが最も大切なのですが、遠隔では困難。後期は「グループワーク」を中心に計画していましたが、2～3人の単位でしかできません。寄席では“場を温める”と言いますが、授業も同じで、学生たちが同じ空間に居合わせ、意見を交わし合うことで“いい空気感”が生まれる。だから、こそ、隣にいてほしい。対面というのは、教員との対面ではなくて、学生同士の対面なんです。対面授業の重要性を、今あらためて感じています。



先生の 仕事道具は？



ライフヒストリー / ライフストーリー 研究には欠かせない「カセットテープレコーダー」と録音済みの「カセットテープ」。今はICレコーダーにとって代わりましたが、平成中ごろまでは、このタイプが主流。常にこれを持ち歩いて取材をしていました。

時岡新先生の著書を ご紹介します。



『＜不自由な自由＞を暮らす ある全身性障害者の自立生活』

発行：東京大学出版会
ひとりの全身性障害者の自立生活の様子を十数年にわたって聞き取り、自立生活のありさま、とくには介助者たちとのやりとりを素描した一篇。



『喪失と生存の社会学： 大震災のライフ・ヒストリー』(共著)

発行：有信堂高文社
阪神淡路大震災の遺児家庭の生活を10年にわたって追跡調査、研究した成果のうち、主に10年目の状況について聴いたインタビュー記録。

『愛知の障害者運動 －実践者たちが語る』(共著)

発行：現代書館
愛知の障害者運動を牽引し、全国の障害者運動の中心をも担う3団体の活動と事業の40年をまとめた一冊。